青森公立大学　地域研究センター　　第17号　2013年 11月発行

地研ニューズレター

ISSN 1882-4218

目次

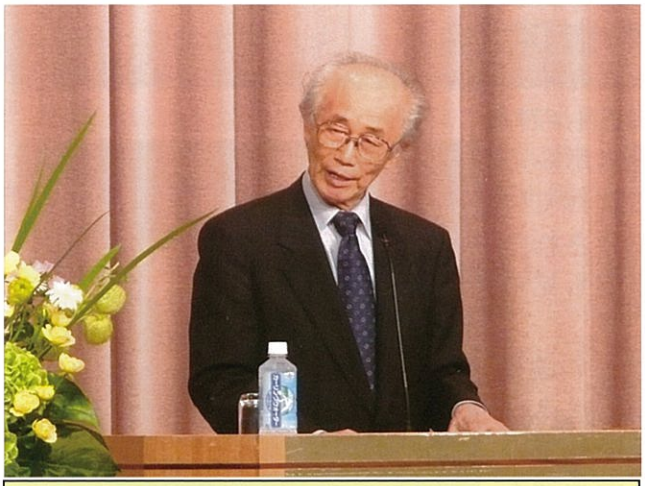
◇青森公立大学開学２０周年記念事業 ２０１３年度 青森公立大学講演会 報告 ・ 1
◇鰺ヶ沢町における地域資源実態調査活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
◇国際比較研究会報告「コミュニティ・ビジネスにおけるイノベーション」
—ネットワーク・ガバナンスの日米比較から—・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
◇学生と今別町商工会青年部の協働による「今別町遊び場マップ」づくり ・・・ 3
◇２０１３年度 公開講座 外国語会話講座 報告・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

青森公立大学開学 20 周年記念事業
2013 年度 青森公立大学講演会 報告

９月７日（土）に青森国際ホテルで青森公立大学開学２０周年記念事業として、青森公立大学講演会を開催しました。

経済評論家の内橋克人氏を講師としてお招きし、「『グローバル化は地方に何をもたらすか？』—地域社会の未来を問う—」と題した講演会には、約２００名もの方にご来場いただきました。

内橋氏は冒頭で、技術発展から得られる恩恵を皆が等しく享受できる国・地域づくりを提唱していました。その上で、本学学長のＩＣＴを利用した青森県内での近年の調査・研究に触れ、ＩＣＴを利用した高齢者のケアに関する「青森モデル」が発信されることに期待を寄せていました。



【内橋克人氏プロフィール】
１９３２年（昭和７年）兵庫県神戸市生まれ。新聞記者を経て経済評論家。９０年代から一貫して市場原理至上主義、新自由主義的改革に対して警鐘を鳴らしてきた。ＮＨＫラジオ「ビジネス展望」のレギュラーをはじめ、半世紀にわたってテレビ、ラジオ、新聞、雑誌などのメディアを舞台に活発な発言・執筆活動を続けている。国連「国際協同組合年全国実行委員会」代表を務めた（２０１２年）。第６０回ＮＨＫ放送文化賞など受賞。

また、内橋氏は、グローバル化には２つの側面があることを指摘しました。1つには、世界の子供たちが交流していくことは良い側面であると評価しました。その一方で、ＴＰＰ（環太平洋戦略的経済連携協定）を例に挙げ、アメリカ型の市場原理主義が広がり、その価値観が世界に広がり、無条件でそれを受け入れることによって地域コミュニティーが失われることに警鐘を鳴らしていました。その上で今後の社会は「コスモポリタニズム（地球市民主義）」の上に成り立つべきであると強調しました。

更に、ご自身の阪神淡路大震災において得た経験を踏まえ、震災後でも大人しい東北の人々に対し、被災者支援のための制度づくりの前進のためにも「どうか皆さん声をあげて下さい。」と呼びかけていました。加えて、地域の「Foods（食糧）」「Energy（自然・再生可能エネルギー）」「Care（介護・ケア）」を地域でまかなう「ＦＥＣ自給圏」の形成に向けて新しいコミュニティーを創造することが必要であると提言していました。

最後に、ドイツの詩人・作家であるエーリッヒ・ケストナーの言葉を引用し、「賢さを伴った勇気を持って下さい。」と訪れた聴衆に対して激励の言葉を送り、講演を締めくくりました。

鰺ヶ沢町における地域資源実態調査活動

２０１３年８月から、鰺ヶ沢町において本学学生による調査活動が行われています。

今回の調査は、鰺ヶ沢町のタウンプロモーションの促進に係るものです。大学生の持つ町外の第三者としての視点から、地域資源をモノやヒトに限らず、文化や行き交う情報も地域資源ととらえ、鰺ヶ沢町に散在する地域資源を発掘することを目的に調査活動を進めています。

町役場職員の方と学生による打合せの様子

鰺ヶ沢町は日本海に面し、秋田県に隣接する東西約２２km、南北約４０kmに及ぶ県内で８番目の広さを有する町です。町南部には世界自然遺産の白神山地が位置しており、自然豊かな土地柄です。

調査に際し、学生調査員はまず、町役場で本調査の目的と町の概要、および町が直面している課題について説明を受けました。説明を受けて学生調査員の一人は「抱えている問題を悲観せず、明るい面をどのように見ていくかが大事だと思います。私たちも町民の方々と一緒に少しでも鰺ヶ沢町をより魅力のある町にしていきたいです」と、その責任を受け止め、緊張した面持ちの中にもやる気に溢れていました。

調査は、各種パンフレットやＷｅｂサイト等の情報を基に、実際に現地に赴いて観察や聞き取り調査を行うことから始まりました。中には、初めて鰺ヶ沢町に訪れた学生調査員もおり、事前に調べた情報が本当なのか確かめることから始めていました。町内の様々な場所に季節限定で開くお店では、町内産品であるスイカやメロンが、普段小売店に並べられている何倍もの量が並べられていることに非常に驚いていました。

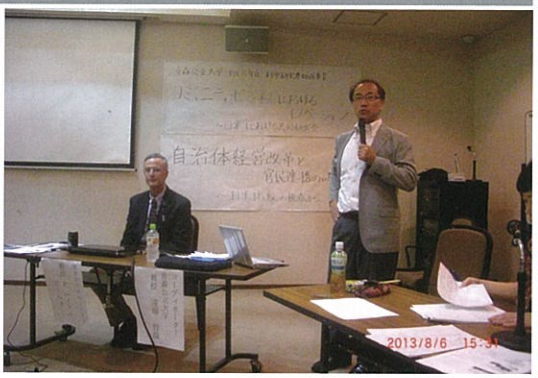
また、調査員が「リレー観光」と呼ぶ方法でも調査が行われました。リレー観光とは、多くの観光客が集まる海の駅「わんど」を開始地点にして、移動する先々で出会った方に聞き取り調査を行い、その結果を基に次のスポットを決め、調査するものです。人々との交流をする中で、町民の方々が誇る観光スポットや町外から訪れた観光客の方々が何を目指してどこに訪れているのかが少しずつ分かってきたようでした。今まで紹介されたことのない魅力ある商品や場所を見つけて、興奮する姿も見られました。

「幻の魚」と呼ばれるイトウの養殖場での調査の様子

町が主体となって行っている「金あゆ」や「イトウ」の養殖場も訪れ、担当の方からお話を伺っていました。実際にイトウをつかんでその大きさや触感をメモや写真によって記録していました。実際に町内であゆやイトウの製品を購入する学生調査員もいました。そのような体験の中から、「甘露煮の調理方法の説明があると買い求めやすいのでは」などと気づいたことをメモにまとめていました。

今回の調査の結果は、「地域資源マップ（仮称）」として地図形式でまとめられ、報告書と共に鰺ヶ沢町へ報告される予定です。大学生の目から見て、鰺ヶ沢町がどのような魅力的な町に映ったのか、報告が待たれると同時に、今後の鰺ヶ沢町がどのような魅力ある町に変化するのか期待されます。

国際比較研究会報告「コミュニティ・ビジネスにおけるイノベーション」
―ネットワーク・ガバナンスの日米比較から―



コミュニティ・ビジネス研究の中で、コミュニティにおけるイノベーションに関して深く研究しているものはあまり多くありません。限られた地域資源や人材の中から、いかに草の根イノベーションを起こしていくか、そのプロセスを明らかにする必要があります。今回は、そのような研究の中でも、特に、ネットワーク・ガバナンスの日米比較という視点から、検討を行いました。つまり、草の根イノベーションを創発する条件として、どのような自治体経営と、地域の協働、すなわち様々な経営主体と行政とのコラボレーションがいかに可能かという課題の解明です。

日本でも、葉っぱビジネス（徳島、上勝町）、高校生レストラン（三重、多気町）、ローマ法王へ献上米（石川、羽咋市）など、ワクワクするような素晴らしい実践例が生まれています。その自治体経営は、第３セクターや直営など、一見従来の制度的条件の中から生まれています。しかし、よく見ていくと、志ある人々が、既存の制度やシステムをうまく活用しつつ、新しいストーリー（物語）を紡ぎ、多くの共感を得ながら、仲間とネットワークを創りつつ、オリジナルな草の根イノベーションが立ち上がって来ていることが判ります。これを、地域における「ストーリーとしての経営戦略」と言ってもいいかもしれません。そして、既存の制度の中から、制度にゆらぎを起こすネットワーク・ガバナンスが創出されているともとれます。

課題は、このような草の根イノベーションの創発をあちこちで沢山なされるよう、自治体経営のインフラやＰＰＰ（官民パートナーシップ）のネットワーク整備を、量質共に、如何に良く行っていくかです。今回も、国際比較を通じ、多くの示唆を得られた貴重な研究機会となりました。関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

（研究員・教授 遠藤 哲哉）

学生と今別町商工会青年部の協働による「今別町遊び場マップ」づくり

津軽半島の北端にある今別町は、津軽半島随一といわれる袰月（ほろづき）海岸を始めとする景勝地や「荒馬（あらま）祭り」などの伝統芸能を当時のまま伝えている、歴史と伝統と景観の海峡に面した町である。また津軽海峡トンネルの本州側の入り口にあって、世界トップレベルのトンネル掘削工事が展開された町でもある。

しかし、今は人口減少や過疎化が進み、高齢化率が青森県一という悩み多き町でもある。そうした中で、２年後の平成２７年（２０１５年）には北海道新幹線が開業し、町内に設置される「奥津軽駅（仮称）」を介して町内や津軽半島に外からの風が吹き込もうとしている。地域の活性化を模索する津軽半島にとっても千載一遇のチャンスだとして、多様な取組みが各地に生まれてきている。

今別町の取組みの中心が今別町商工会青年部である。本学の地域みらい学科の佐々木ゼミでは、青年部から委託を受けて、ゼミの２年生が中心になって「今別町遊び場マップ」の作成に参加、協力している。

今別町には景観や伝統芸能だけでなく、釣りの穴場が数多くあり、また多くの種類の魚、貝、海藻などの海や川の幸、山の幸に恵まれている。これらを「遊び場マップ」として紹介し、県内外から釣り客、観光客をお招きし、地域の活性化や再生を図るのが目的である。

マップ作成は学生たちと青年部の方々が合宿して夜遅くまで取組みの方針を検討したり、「釣り場」「宿泊」「飲食店」「お土産」の分野別情報や町の歴史などの各種情報を町の方々から一緒に伺ったりして、取組んでいる。

学生たちの若い感性と青年部の皆さんの地元に対する愛情や知識を盛り込んだマップが出来上がりつつある。マップは１０月２０日（日）の「いまべつ秋祭り」で配布する予定である。どういう評価をいただくのだろう。

（研究員・教授 佐々木　俊介）

2013年度 公開講座 外国語会話講座 報告

８月から今年度の外国語会話講座が始まりました。今年度は、観光英語(初級・中上級)とビジネス・イングリッシュ（初級・中上級）にＴＯＥＩＣ対策講座を新たに追加し、全５講座を開講しました。

観光英語・初級では、お客様のお出迎えからお見送りまでの「おもてなし」に使用できるフレーズを使った会話練習を行いました。また、青森市内の観光業でご活躍中の方々が多く受講して下さいましたので、「青森県の名産品の説明」や「温泉の入り方」といった青森特有の状況を英語で説明する練習も取り入れ、受講生の方々は熱心に練習していました。中上級では、Tourism today, Managing tour operations, Hotel management, e-Travel, Sustainable tourism などのテーマについて、一歩進んだ表現・内容を学習しました。

ビジネス・イングリッシュでは、フォーマルな場面でのあいさつや会計等の接客の際に必要なフレーズを使った会話練習を行いました。お金の数え方や売買の流れに沿った会話表現を紹介した以外にも、仕事中に言いたくても英語で表現ができなかったこと等の体験談もいただきましたので、それらの体験を内容に反映させて会話練習をしました。中上級では、毎回problem-solving 形式のテーマが課題となり、ディスカッションをしながら、解決へと導く形で学習しました。

ＴＯＥＩＣ対策講座は、６００点～７００点を目指すことを目標に開講されました。模擬試験への挑戦と解答・解説を通して、ＴＯＥＩＣの問題形式に多く触れていただきました。

本講座は、次年度以降も開催する予定でおりますので、どうぞご期待下さい。

観光英語（中上級）の様子

ＴＯＥＩＣ対策講座の様子

多目的サテライト 青森公立大学まちなかラボ

本学の教職員、学生とともに、地域社会に関する研究、各種プロジェクトを行う際のディスカッションの場、地域振興、産学官連携に関する相談窓口として、ご利用下さい。経営相談も承ります。

〒030-0801青森市新町1－3－7　青森駅前再開発ビル(アウガ)6階
電話:017－718－7025　Fax:017－776－2082
E-mail：lab@bb.nebuta.ac.jp
http://www.nebuta.ac.jp/machinaka_lab/index.html
開室時間　１３：００～２１：００
（毎週日曜日、年末年始、アウガ全館休館日、５～８階公共施設休館日は、休業いたします。）

編集発行　青森公立大学　地域研究センター　2013年 11月発行　ISSN 1882－4218